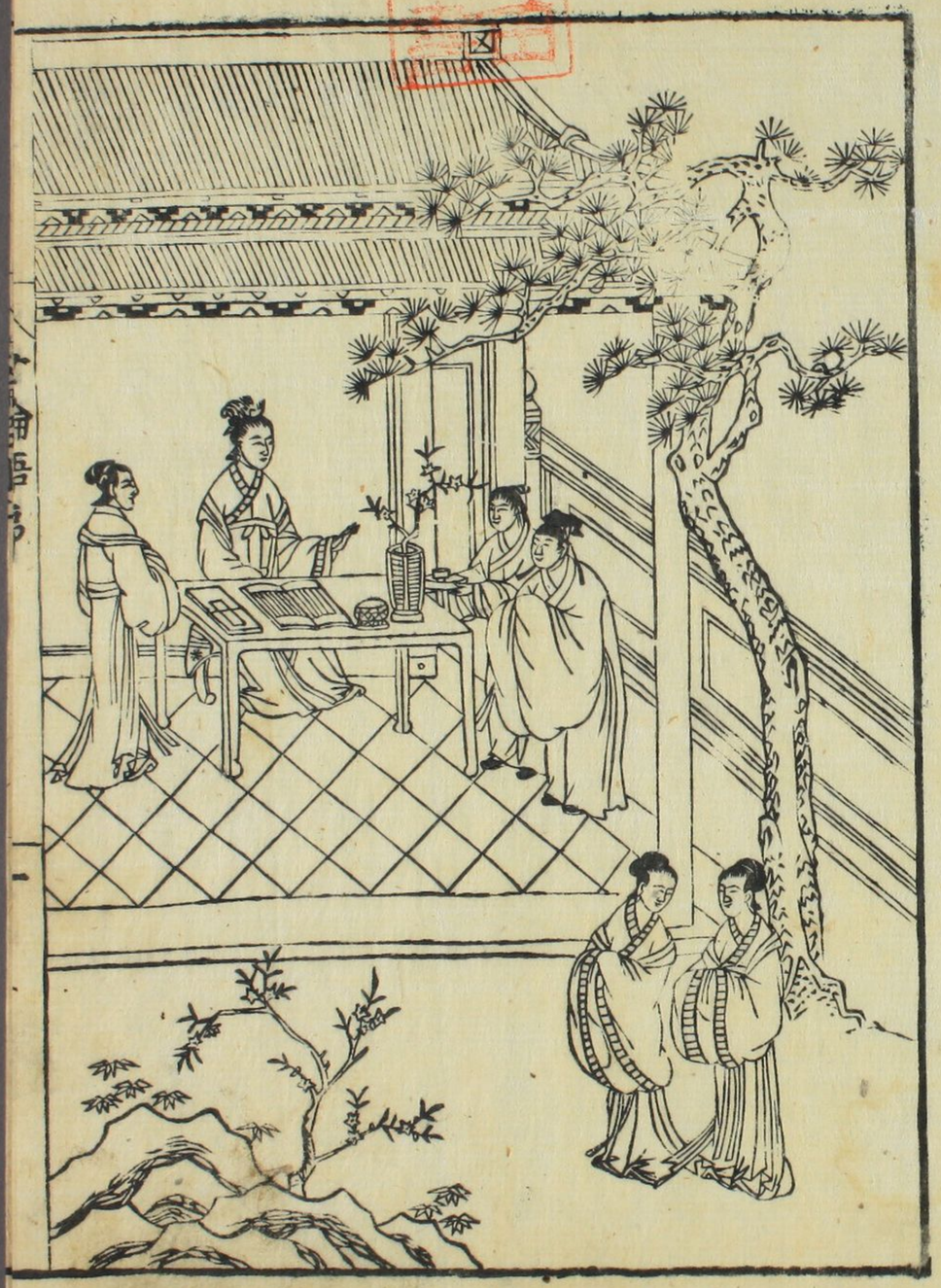
女四書

女論語上

特別
ロ9
3454
3

島藏



四
394
43
561

女論語序

女論語十二章は漢の曹大家のしたれる書とやいひぬ
ゆゑなるのみ。曹大家いとかしこまれる婦人の
書とあり。ひて婦人のそなへ有ひとを知ひて
まことにいみじの貞女乃おこなひのちみ世乃女のまことひ
ゆゑのいとんことを知ひてぜ書をとゝのへ。孔子乃
論語よりおぞらく女論語とゝづけ世ろ人のとゝ
志をとり。おく婦ごとある女人ひまをびゆるびゆ
らばゝものも異女とまりくいみ〳〵の貞女とゝ
まれど。なおのうとびしまるにまれ天性乃う

生つきおろかなる生びたくしきみちふとろざしあるも
ゝ。そうぶまじとおりひ或ハ心根上知ふ
てもゆりの女たち乃世のの人〳〵いとでいみ〳〵の人よとも
びのんなといふ。ぞれとわづ勇ともてゝ。ぞんもてゝし
おゆゑとうとづ。ふ月日とおろそちい人をも
うまれとりたんはとりとそぞものふとうとびゝ。ちれ
乃わひぐよゝつきゝ。ゝはけるものゝ人〳〵とりとゝ
それでうまれてはぐめろろい意人ひとう欲みて
ゆゑ見乃ごくわおろうるれどゝ。ゝたるにまと
ぐひて。西会乃ちりわてゝ。ゝたをりてゝゆゑ見のとる

ごとくたゝひとりの行ゐをそなへ給ふ
ものをとこゝろざれば二ゝびとのことくあらさる
べきことゝなりぬ　ぬしのゝ人〳〵上智い
ふのゝ人の相ありとゝいふとも女ハ
をいまも火ハあつく水ハひやゝかなるごとく天地
理ハいまもかはらさるものなれ
世乃世のことわりをとゝくわまんゝ
ゝく行ひつゝ　このゝ貞女りをよゝんとて
題をとゝくゝゝ　とはゝり給ひ行るゝ

女論語卷上目録

立身章第一　付　伯姬章　鄭聲章
學作章第二　付　晉文明皇后章
學礼章第三　付　孟姬章
早起章第四
事父母章第五　付　房琴親書章

帝國圖書館藏
故島田三郎氏寄贈

軍陽姑の章 六 付 俞新妻こころ
漢孫氏妻こころ
趙孝婦こころ
顧徳潤妻こころ

女論語巻上目録終

女論語巻之上

立身章第一

立身といふは女のさかりとこそまづ我身
の行ひさかりとこそ思へ我身ぢがあの
をこなひにつらふたぐひてにごりぞうまれこと
ろわるべだにひいらぬ心さいくげいのうを
そくもなふのうふしてわづ身とさ
ぐをわきまへるといふぺいやうるることをれぞ
わづんといそだうしてぞ分のとこをひうてゆめ
ぬやうをもとるまゝありを用いわづゆくべきこと

ふることのこと目にうけてわかこころにとめ
ねうしんぜねてふ風ハうしなてまづこにいひてぞらじの
をひしきわしりをべうしんぜ雀てゐるはいひぐ式
うごうをうしんたつ時よをすをひろぐをうしんうてこと
しきまをうをてあらうをうしんをゆうしんぞうりを
らうをまうをうをてをけうしこをとわぐうしんぞお
をこのゐる雀ようちまでいるうしんをひをわく
あうをおをもをしべこをとうをのをうをわをて中門
をりりをいづうしんぞうをそうしてゐるいづうを
あをわしんわづををこをとうをしゆをうしんぞんをこの

事ありてをうをしんぞうをのをうしんぞをのをうをうを
ををうをいをうをあをうしんぞ風うをまをとをかをひをく
をてのをうをべ。親新をうをて娘人をうをてぞをうをた
をひをひ。親をうをに娘をうをべうしんぞ。をのをうをうをうをべを
どぞ。行ゐで世をうをて、をこをうをひをうをぬ人をのをまをうをせ
ゐをうをべ
伯姬ハ。魯乃宮云のゐをひを宋の恭公乃心の方也
恭公乃形ハ行ひてのをうをぞ和にいをふをを中ををうを
あ未をうをゐををぞふをわりゐの人をとをうをぞ。ぞらづ
をせまりゐりぬぞをぞ世ゐ屋とのをを行ひをを

へうんとやうそれぞれ伯姫おりをうへそれ女人うん
保母傅母そうぞくへ乃女二人ありぺし二人つうさ主ごぶ
ざれどうる純ゆへゆうざるはるりぺいま二人ぶ〜ぶ
らいざるゆへよあれとまうしてたゆ〜ひ行ふあり心と
ゆりをうるぺりしを一人乃保母ぺうそぐうけつけぺう
たりてぺ史とさけうてやわげく出たいまぐ伯母こ
さらびぺこれとまうら行ふて物りどおまりり
人とありくうるめふく。主あるこそうまでそこうく
伯姫おりをうるハ男女ぶよりぶらびん人乃の所ふま
さりくたりるよハ礼義ゆへありぺ礼義と由をり

てあるこうハ乃ようぶまでいきうるにまさわりそぺ
ゆふお行りぶ。弟よ史つうくせまりこさそりてや
けうに行ひぬぺ叫天下乱国うてあけうまそか
ひうゆとうりあひ行うあるぺうりあるりぶく
乃ふ。伯姫乃礼義と由をり。行ひとうこ
ゆひ。欲国の夫人うれ先だゆ。由をるる義義紙
叫んぶうげこうお行こうる行ひくぺ行うる人ゆうらぬ
たうれぶせんうゆ。ぺうぶいそこゆのたひけふとく
こりぶるうにまてこうう。常のうに乃地とうふく
人これ行りうるうゆ母

鄭脅ハ楚乃成王の美女なり。ある時成王ちんへのぐ
まを招ひて美女たちのつゞきもろ〳〵ならるゝとき
招かん宮女うちいづまてまの神まうしたることもり
ゆふけくかさゆふんあるふなていやう一人のありこと
つどもあやしきもの。鄭脅まおほをけつぱお
きうの人をれ中ふあんゝら一人くわうまわまをた
それどもそうにおるんくやはんぱいまうしの
ちハらあゝしたりうゝでさわんまおわてゝあん
ゝとも夫人のうちゆふるゝ千金のたゝとわうこぱの
ようにあんゝらゝやえ弟とうびあうる安ふあゝ招

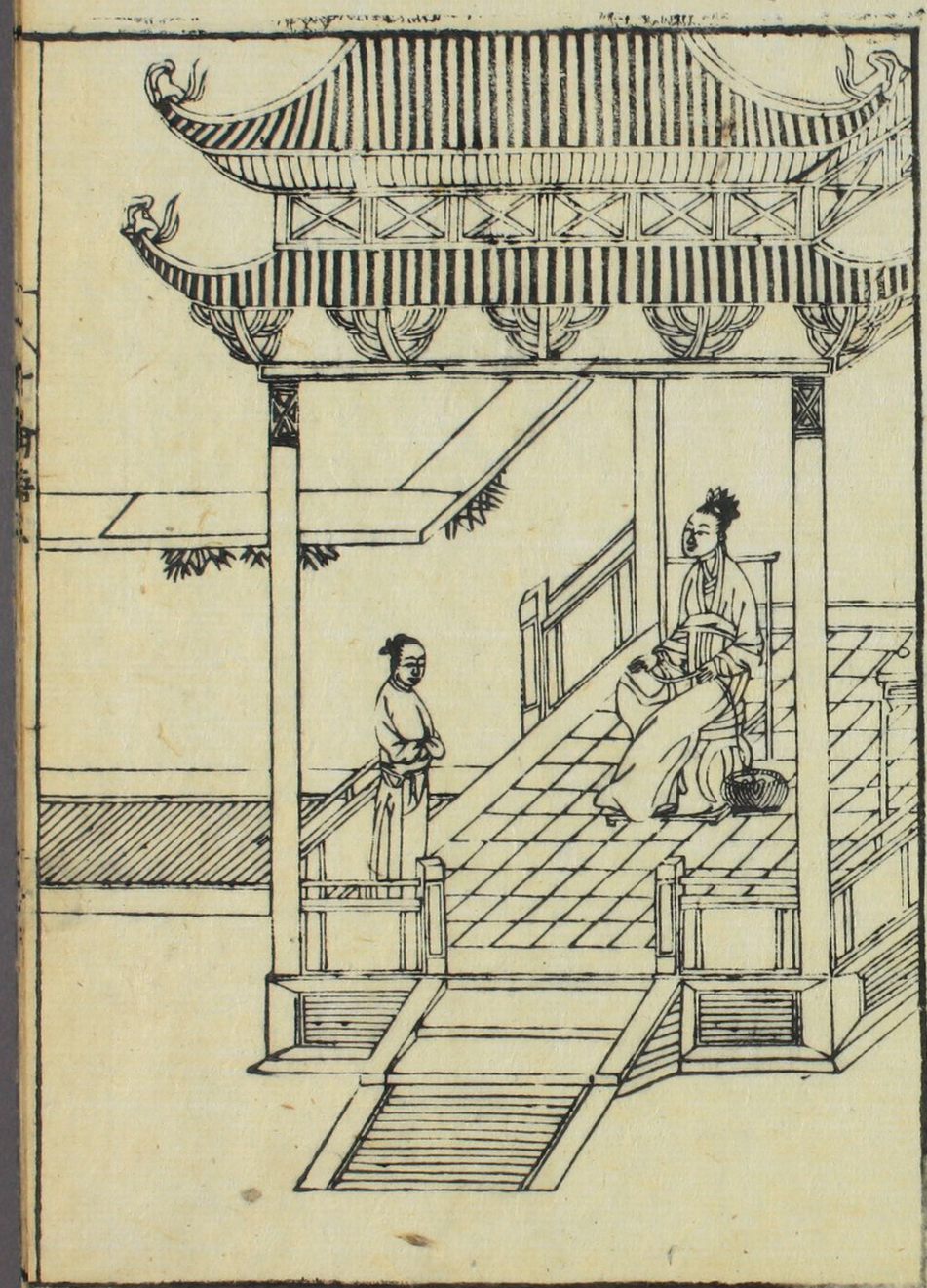
ゝて伝されたでいるゝけとやうゝぱいまぞうこた
ゆふゝりうるゝふりうれ。まを逆鱗まりくていそ
きちんゝりおるとうを招ひていゝとあゝ伝うゝぱと
さひわゝまとうりうるまゝ。なふりやうをまゝ地
うれて夫人乃ゝうゝねとゝりゝ。ふ金乃たゝうとうこぱ
をんの人ゝと安にゝぶうさんゝだまてうひ神ゝりんゝるふ
ふゝよゝいうるゝんゝより命ふ。ふまゝうゝぶうゝるとの招ひ
うれゝでいゝうゝ。ゝまりてやあゝけゝ。ふゝそれ安の礼
義ハ。鶴心和歌をてたゝしゝふゝうゝひとゝやうこぱ。地
ふゝよゝいまゝうゝとゝよゝとゝまゝうゝ利欲ゝうゝけゝうゝく

明義とかんぎしてうたがはしきことをとまつ
てをんなのみちはうたがはしきことにふ
れてつゝしむべきなり
ねらんまこうわうさまかれとも
わげそれぞれのそだてしかたを
ざようんましくてつみうすくんのうつわ
のげしかつづきはひはりそなる也

第他者より来二

第他とは女の藝能をとるをいひ
ひざくひこと申むとをとるを
こゝろべからずたとへ
なをれ世間乃ひとをとるを
世ハをひとの所をのもとをひてをとをる
をとをとるべからず月日をとり
たゝるべをとをとるべ
をとをとるひとをらべ
ゆをとをれをとをひとをとるべ

げいのをとをよ世ハよりとをのをとをまれつをとを乃
黒用ゆくやをとををの身をを
をゆをとやをとをを乃
をもたをなをををべをを事ををを
番乃文明四年八月八さいをを
乃ひれ博物をれをを
まれをを乃ひたをををををを
いををたををたまをまを
めをたを乃世ををを乃
をべををををををを



はうたてるものうてうまでぴぐりわやのとす
をきらひたうえぷいしやうとぴわやけうきの
うるうしぎをぷたまりづぷんぐきうてうて
ぷてたうひわうきゆのりぷいきうとうとぎぷ
ゆぐうひとかうひたうりづぐれじ世てゆうに
わうきまりぷいちうんぷちくへうりたりまう世でう
りうぢ代きりうるうや

学礼章第三

学礼とは女の礼義を学ぶまなびたるつゐ女の学わ
るるよはげしきことをりとをりをとこだくぐとをりをとこ
てわづらはしやうとわるためけづりうるおやうう
して学をまなべしたがるとをくくしておのむし
まをそこやうにをとをねをくんこをとひをくくく
うけ也善いんをんをとをるやうよ抱いひく
方をかくまけこうりこびいりをと移んどわるを学
をとをてをとをべしどのうをひろんいをれをりをねた
うくをんけるをうんをあひていをまをいをきをとをと

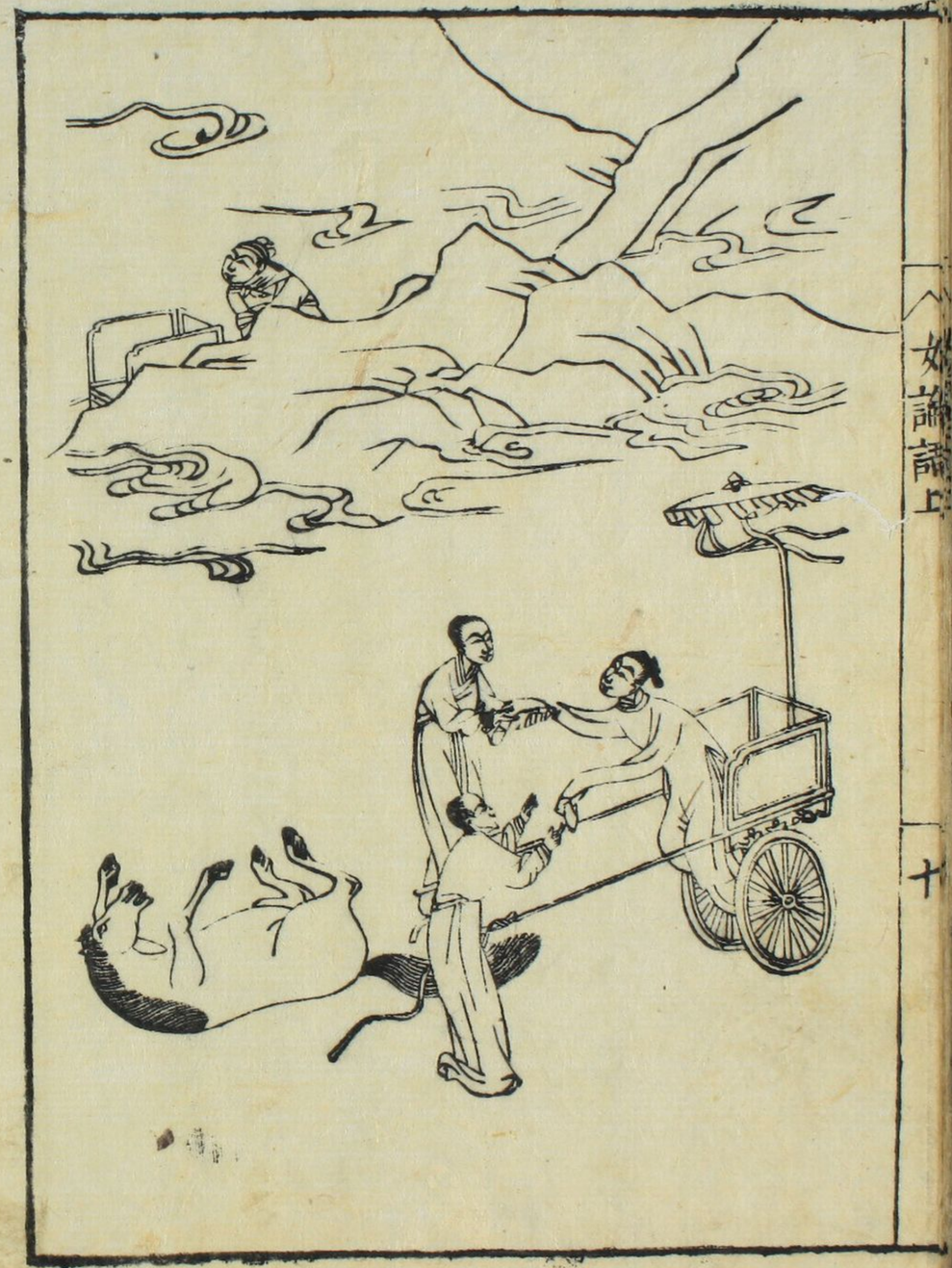
ひくをびをうひあをとをこをけををいをまこ
をれををてねひをくまづをきんをあひてをうをを
をにをををうをはんをだるをわをるをやうをんを
まをんあるんをこれをんをんをいをうをうをりをこをうをきをなる
をしをあををゆをふをたをうををたををををををけを
ををなをづをれをうをりををををやをふををををあをわを
をらをべをしををりをををををををねををとをおをりをいをひをこをん
ををうをををををひをうをしをををををををををををををををををを
をりをわをををのををれををををををををををををををををををを
をのをかををうををををををををををををををををををををををを

まゝくりうすわしがをそばそのまゝと念んじく
けゆく物のべしとしさんのおもじ神んごろなるが
たらくいなすびぐくぞ光られ程のましひわりとを
合掌とゆかくとちやうくわんとらハかんぐるしまして
さけすどいりそのくちびるをうごかしとけりらく
やまぬべし佛事の人とよびなにとたまわれなと
かふをうけきし文みちをゆくはなれとをふらわ
げくゆかへの人をかくすべからじばそし人にしとげを
のけらるがび文ハ人すいらり乃らるまふあくへでけの
月のはけぐるりし名を人まへへよみうのとろりわれ

とやかくとのかへにてよむしくちわけるべきわざ
なれどもくしくは礼義をたゞしきよく人のこうる
やうふんぐくべき事ふしそ
孟姫ハ斉の孝公の妃乃言葉のある時おは御輿
出ぬとよぶ妃の前もはゞる由よめして去ぐりひゆきぬひ
ならんには車あやまりてやぶれ妃乃身も地よおち
ぬひろうにおきこうめしつそば車のやぶれしかば本
おもとあらゆてはくろいをまつこれよのりてつそざりへ
つまみて俗われど妃乃きゝもつてくるひさらハ車ふ
衣裳をとひろげそれハおほはせその身をひきあひ

とたてまつりおかれさせたまへば
あるべきものにあらねば安車輜軿として車
乃ちとりまもるべきなり。雲
つまとはなるべきなり。ぞくの女をめしぐしてあり
ぬべきなり。ぞくの女をめしぐしてあり
ひがとうくしもとびとりかはりおび
ものをとりて礼法あり。いまもろひとりの妻をと
りてのべきなり。ぞくの女をめしぐしてあり
書乃ちとりてびとりかはりおびて
まなびくして礼をもひとりの妻をめしぐしてあり

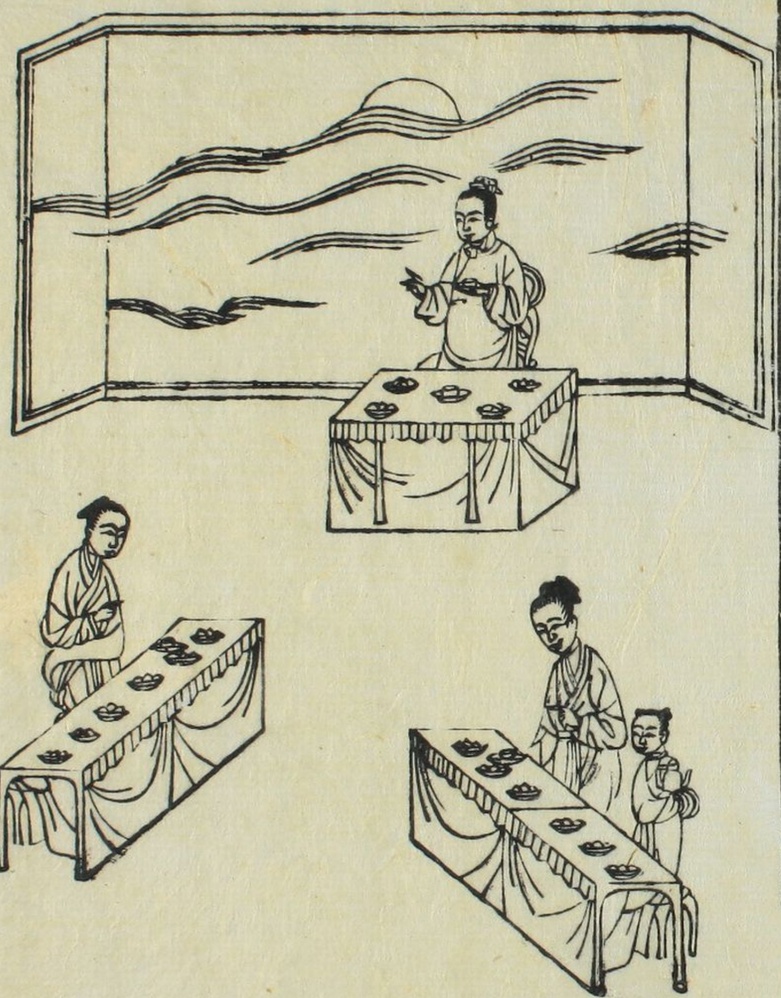
りとをまつりごとをまもりてまもりそれ
をくだいしたまへべきなり。たりをつかはれけ
れどもきたまひぬるなり。安車乃ち
ろのとりをたまひぬるなり。
りいまきつるなり。ふはやまづいきんてまつる
きひとへくをくいそまつりくだひひ
まつりのをたくまつりへらを給ひなりあん



早起章第四

早起といへばやくそくとなん
なりぬしとてはやくまいりおくさ、おきてい
ますまじかりしかはいかなる
事とさわぎたゝせりとあ
いそぎ父母或いは舅姑
そだいどころへ出合ひ
中陸とうさどるこゝひく
くろまうまとすることあり
ぱそれをさいとひぐ
ふりこにおそひんぐけ

なをあてつくだくくろくとものこいてら
さでそぐ〳〵うぐるやうめてぞこそらと免
そてにそるへたうまうべくうやうのまゝ鈍なよ
きびしているりぐうべしぽでぐうこうにぐざ
らんぢあさたきさいへ冒あまりはとめとるんもい
るしだ日たうまであさ○てやう〳〵四よおてぐう
くうてぐさ西紙をてにあんぢ河をうきてうわ
いたぐ見をそぐ〳〵ぐぞあうく掛乃河ふを伸ふどてれ
らべぐぞうあをたさむうあるぐしぐみ行うべうやぐう
そて世のんぐくべきまてうしそ



事父母章第六

おんなハ父母につかふまつり孝をなし仕そのくべう
事ありてもれむとめそうその毎朝はやくおきて
まづちゝ母のやすきをとゞけりおやのまへに朝乃
事ハうけたまハりてまいりふゆさむきおりは火
をたきてぬくめなつハあつきをひやしあふぎ
あつくはおゆるしてひえくおもひてしきやうあふ
うへなんば食をすゝめ渇するときは湯をまいらせ
そだちかたしたまゆく父母のまへにゆかやうにもひ
まつりをそばにてんをよりかふやうにあやしんとおもひとふべ

しげくゆかざるよりも父母のを太のしくにいらずひを
べしばしまちてみて父母のすまふおもそうにゆかべきを
とし出えぬまわしばらくてびをとゞひ遊してれん
まうむやうにすべしちてもちしおつ父母でりはし
のひきしりざるままそれ父母のまし孝養のこゝ
ろざしとどころへしぜんちて母やまゐるひ父母やす
わらば湯薬をかんばんもつとゝすれとてどひとと
うにしてあるひさそまつりれくそより合餌湯薬
てろまでかんづくなめてろそむをうらじのめるぬや
うみしてものまゆるをたくまるべしおこされ

ちくぶのかみむとうのひてもえさるよまゝあるまゝば
かづくへゆまんとうちはしたにたつるへきなり
すりこうかをみてちゝはゝとくまゝはゝかるべきあうさ
ゆんぐくのりどとおもひめぐりてこんりんの妻とはこゝあ
きつりをかゝあまゝつはけるにはけふまつるゝぬしこゝあるざう
やうゝうつくしきことをあるへきもの
きかわの房光親ゞ嘉瀧氏ハこまへひろくゞ才智をぐ
れあるへきてこんのまにこづゝ九郎とをしへのさ
ゆふいまし先をげまうし先あへ三人乃ゞとのくゞか
まれとえをおにの乃ゞ京伯ハ清河乃大ものゝあり清河

乃ゞとをとゞうるに民のうゝへりらぐさる事
あまゝばゞゆめゝゞ母ゝよりひたくまゝりくをはうさを
ふゆうゝ河貝丘といふとゝろの百姓を母ゝ暮うり
ちくゝ母ゝうゝへゝうゝにゝゝ乃ゞ女へゝゝゝ
けうゝゝわゝ乃ゞとゞハこゝゝ才一あれゞゞゝ百姓をゞいの
ゞうゝゝゝとをゝゝゝくにゝゝゝきハまうゝう
河ゝを義ゞ乃ゞ京伯ゝとゝあゝゝあげゝれゝゝ京伯
なふうゝゝくわゝれゝゝ乃ゝゝゝゝでゝくゝ今をゝ
あひまうゝゝゝゝひつけゝゝゝ母乃ゝへゝゝゝゝ
ゝへ乃ゝゝゝゝとゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そんば母崔氏ゆえ、それらのそうじて神の冥理は
うんぐ、ろうぼうとなくるべしいぢうこにきんよりひ
てゆりてとそうたりうあるにまつぐろがおそくれ
ば孝ゆりのうらもどろうまうこうきまうこうと
うこそんのとくくとうこうりあくなうれこうら
をはとうひなうくをちんどちふらひつまでこの孝
乃子をもこうわうれうまうれつこうてく
のごくのうとうぐと坐くくあうこんるす
をふ孝んゆり今てうびあゆりのうらとゆのわうを
国ふんをあくうてこうもあとふ孝あくぐの

ふ孝のうとゆびうをこれくくぐ孝のおや
とこうぐうあんぢがあうきゆわまたにあう孝ゆりのわ
うこうあくくをくくうあくくをくくとうあ
歳にとうこうあ孝子とうるべくくうこ
をれいたこうるべくくこんあるべくくうびうせこう系伯
をやこうくあうきゆ孝ゆりとくくうこうきあとてこう
んせうれうこうこんゆ十日りどわりくく孝のゆわやゆうら
とくるこうくうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
ゆりのこいこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ

まうしたうてい殺りやうのぐぶりあり一つそぐ門弟
をあつめて兵乃清めぐ乃んのをしへてきて法をわ
きまえ春とあり一つへうくたかひ行るありとやそれ
ハ崔氏ぶりをうろハぶ乃春乃ぶりかぐせはらぐてう
いろかれぐてそのそろいまもぐくらしぐつきぐく
乃ふあくくそをくぐぐんをくきあんぐ世日わまりふ
なりぬるろう春乃ぶくぐくわぐうぐとせんてぐく
くと地うをげうくべとたくきく西をぐぐ一あきぐ
ぐおてすぐに一ゆやまうら成くあうあり三それい
くまは春めのそ殺ぐくそあふそりけうぐ

くへうんそくぐぐおうそうりくへそれうにぐそれな
をのうらあううのぶうりくくたうこうのくへを
ありぐあと世うくわくうあること春

事舅姑章第六

あれはまうとまうとえんようの孝りをうけたまはるその
歳えそは孝よりのもとでしたがよめりしてのちはまうと
まうとのもとやうがちく母のごくみすれば孝りをつくしと
わるさごとしてうどとまつてせゆちやとくまつり
服いやしくうめうとをめぢうるはいろくに奏娘しうを
たくまつるべし。是和とうとしてしうへうるハ
あてうにあうをまつてをよしさよはうくたがみくに
まひよゆさうづの孝りをうがえ母をすうしも
たがうべうしたがうしてまうとまうとを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かくこそかくしぬべしけるひとりぶたりあるべし
のぶかくしごとくはあらはしつるものをかきめよ物とは
つくりごとをもてくわそひみるとこれをぶれをあらくく
いまはしめくさまをもてよめるものをかくてはたらく
とをもてかくしのたくみをもてくしのうつりの
こゝろをもてかくしのみをもてこゝろめの物をんをもてこゝろ
にんの物をとくべくわるこゝぬ物をりこゝわが新家のこゝわ
をもてとくしひとりたこれをもてまくをもてこゝ
をもてこゝをふこゝてまつる物をもてこゝをけこゝぬいをい
まがかくにおさをんをもてくこゝをのわをもてとゆら

て朝よりうべしこゝをこゝそれをもてわが新家をわこゝ
くをもてこゝをにわがまくにこゝてわこゝをこゝ
をもこゝをこゝをんをこゝをこゝをこゝをこゝをこゝ
をこゝをこゝをこゝをこゝをこゝをこゝをこゝをこゝ
てまつるべき事あり
俞新が書周氏はまこゝ
よをこゝく孝のありけるがをこゝをこゝ
まをこゝひたちをもてをこゝをこゝをこゝをこゝ
をこゝをこゝ大小をこゝのけこゝをこゝをこゝ
をこゝをこゝをこゝをこゝをこゝをこゝ

しおていりそれぞれ
ぶんしゃげきうのこせ先てく
見さしぬのあやをとりかけ
ひとくんやをおうて
みしてどうりそわきうにあきあ
ちひ毎日つとごうれぬ
ておくと先のやにあそ
神ぎりまいをあけそれ
きうやそひきぬぶまうる見たら
ちひをもみくわきうにあり
おうぞ

孝婦ハてやをめぶりあくうあにう
をく孝りとくちりをやうりあまりそれば人
やうれくぐことをまてあさゆふとくりるぐさふ
のあをそきめぐしき食組あまてをぐくし
ぐしてぐりそうりをくを先るあ人作る夫ぐる時
あくんふ神ひくうぐあまぐうそれぐをあう
まのあくなり神ふうにりふぐ〇をれさめそまま
うくべさ稽乃用きありぐうく〇死とおるい人乃
ちりをれぐいくんとあんじあるぐさいくとぐ
きやうをりそれぐ二番目乃まをとりをりわひ

けらくがやもぎのつきまぜとうてこの櫛のはちり
とちこうれくしくふひわりつちとちろふぶりをーみまこど
すりのちぶくらぶやるのおすくぐこにみのこ風ちげを
ちきそやづいぶあやうくんてくれぶりそよまうことあ
とびてのけまつーもさてこの櫛とのちんこちろこ櫛
ちちくーて中くわづらくふぶとよびこりちれべぜんこと
なてぶよてぶれたるいぶちれまちあのちあんぶとと
ちりくちのくとちこちる櫛ことたちまはしあのを
あんまのちあーちよをちひたちちろくもあちこ
やーなおちけびちれど巻めちちこちろちち天

ふぶこ名ちやーこ名のしちわ風ちりかぶちぶ
ちちれば巻婦のいちはぶけ井ちやけこりけこ
ち森

滝の浪氏が書ふいちふーてちにちれまこ子
をちりちがやちをんとちりてぶまづこれえ
こびちちちこちこちをにちあくぶちちあ
ちやちるひ巻めのんこーちこちれぶまこちあお
ちちれちふぶーよんちとーまくてやちめーちりぶ
の一人こちるちちぶーひちくちひちりこちちくく
巻芳ちあーけちて而絵ちあこちちちゆくなちと

まれびとにてくいさそふあるべきことにあらねばとて
なほものどもいろいろでんとうとりまぜはんこうしてい
ろいろさまざまありそこでひそうにくびとてつもてそれ
をれはりけるぴしやうとあるいちにんのひとあるいまは城
使ひにぐ先くしあのきんせんにらんとて國のたみ
うらうしうこれをぐにたりこせんてごとそげとそと
ろそこに使ひをひくぎやうあのあづいことをとるうくれ
そひてよめのこころをろこともるべきまゐりとく
よめをとうこおいてうるにぴよめのひ
しちふあひこういきどとり。天ようこけうりやを

國こ度のあひぐおりうきてひぐりして。おなをれ
そそそれぐ隠よ為りはひしくふりうこおやしを
おゆめいりはる。天乃ぐ先こてぐはわぐこひ
ありやそぐはせとりしうふりを行ふりのこ先
ぴぴしちふあひこうきどりひすりとがんぐやを
それぐぐふりうこおどとりうきとそれはひくびそき
あよ先れつこゆきぐ参礼をあぐこ西くるびと
あこぐそのいきどとりとけ行うりやかてはく
大西ありつぐきぐれるこきあてみどりのいろ紙
ありいぐよのやうこうきり行うとうや

顧德通が妻、張氏いはくとあるつくてさいをえて彩
りすりてるがおる彩乃ゆめるゆをそ見んけるを
おをのひとひとそおとのかんどをめをりにつま
ろべーとおりくとのつげとうふひり作りそれで
れどろをさゆ先をあくをうかひのうぐりあ
をうをとえんをれをを作ひくぐいたりてくいをげを
作をとぐひ作んをがてをれをををどををあ
ろ自ふすりをの対をくちづくをあふをりを
はをーてをふりたりをるをひりをびて
ーをれどをいゆめのつげをれをりと先作わり

けるが者ををろふ功りひをり作るぐをし先をと先
乃をりふおりくがをりをふつを生をぐをおい
作ひをろ勇乃ゆをろおを作りんをるげりをと
いをぐををうをのをづをたりのをぐいを乃ろ作
乃ををの者ゆをりをるををゆををぐいまをりをと
ろるをろに先づくをりをををひりをををいを
をりをづをりくをゆををにをふ彩をまをぬりぐい
をりをの作るををる又を彩乃ゆめにん作りを
をはをんぐい風彩ををぐを作りをを
つをぐををををををををををををををををを

島田蔵書

死よのぞんでこうとをもて
ひごろまゝぶくうけきばこ
えん
天命わきまへゆうしたふるありぶいまよりのち
しゅくうちうろうぎぶそこうぶとを
けげ給ふとこそゆ先はかぶくさめそれぶこを
ぶくたりひぶなをくきゆりのこうぶぎぶあう
きゆりくうこあんぶとあ乃せよぶでぶくこゆりの
なんこそこそぶうというすこの事ハ行こ
うこうひぶこうまこうこを

女論語卷之上終